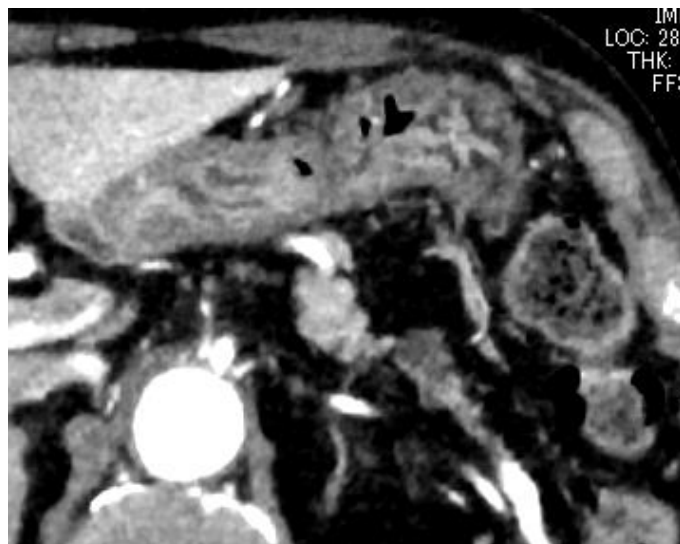


84 歳男性

定期的に人間ドッグを行っており、半年前に施行された CT で膵尾部の局所的な狭窄とその尾部での膵管拡張が指摘され、膵腫瘍疑われた。MRCP では CT と同様の所見であった。CT の画像を下記に示す。

入院時検査所見

身長 154cm、体重 47.2kg。体温 35.9℃。脈拍 80/分、整。血圧 128/83mmHg。呼吸数 18/分。
血液所見:赤血球 442 万/ μ L、Hb 14.1g/dL、白血球 6460/ μ L、血小板 27.5 万/ μ L。血清
生化学所見:総蛋白 7.9g/dL、アルブミン 4.3g/dL、総ビリルビン 0.1mg/dL、AST 27U/L、
ALT 19U/L、アミラーゼ 83U/L (基準 37～160)、尿素窒素 20mg/dL、クレアチニン
0.89mg/dL、CRP 0.04mg/dL。



①確定診断のために行うべき検査はどれか。

- a ERCP
- b 上部消化管内視鏡
- c 下部消化管内視鏡
- d ダブルバルーン内視鏡
- e 腹部血管造影

上記検査を施行した翌日に上腹部痛が出現。腹部は平坦で、上腹部に圧痛を認めた。膝を胸に近づけると痛みは軽減するという。腹部超音波検査を行ったが、消化管ガスのため上腹部の観察は困難であった。

検査所見

赤血球 420 万/ μ L、Hb 13.2g/dL、白血球 9180/ μ L、血小板 25.2 万/ μ L。総ビリルビン 0.7mg/dL、AST 66U/L、ALT 39U/L、アミラーゼ 519U/L(基準 37～160)、尿素窒素 16mg/dL、クレアチニン 0.79mg/dL、CRP 0.25mg/dL。

②考えられる原因は何か。

- a 胃潰瘍
- b 逆流性食道炎
- c 急性膵炎
- d 急性心筋梗塞
- e 急性閉塞性化膿性胆管炎

③次に行うべき対応として正しいものはどれか。2 つ選べ。

- a 絶食
- b 抗凝固薬
- c 離床を促す
- d 造影 CT
- e 輸血

解答

① a

- a ERCP を用いて膵液を採取し細胞診を行う。
- b 上部消化管内視鏡では膵臓の評価は行えない。
- c 下部消化管内視鏡では膵臓の評価は行えない。
- d バルーン内視鏡は小腸の観察に用いられる。
- e 腹部血管を造影しても膵臓の評価は行えない。

② c

ERCP の合併症に急性膵炎がある。上腹部痛、アミラーゼの上昇も急性膵炎の病態と矛盾がない。ERCP の合併症は他に穿孔や出血にも注意をしておくべきである。

③ a, d

- a 膵酵素の膵外分泌回避のため。
- b 血栓傾向ではない。
- c 無理に体を動かすことで病態が悪化しかねない。
- d 急性膵炎の診断・重症度判定に有用である。
- e 出血傾向はなく、Hb も低下していない。

76 歳の男性

現病歴:数年前に表在型食道癌・下咽頭癌に対し内視鏡的治療を行い、その後定期的に上部消化管内視鏡を受けていた。今回の検査で胃体中部小弯に陥凹性病変を指摘され、生検で group V (tub1)を指摘された。

既往歴:右肩関節骨髓炎(乳児期)、右股関節骨髓炎手術後(乳児期)、副鼻腔炎術後、胃・十二指腸潰瘍、ラクナ梗塞、完全右脚ブロック、表在型食道癌術後、下咽頭癌術後

生活歴:喫煙歴は 20 本/day。飲酒は日本酒 3 合/day。

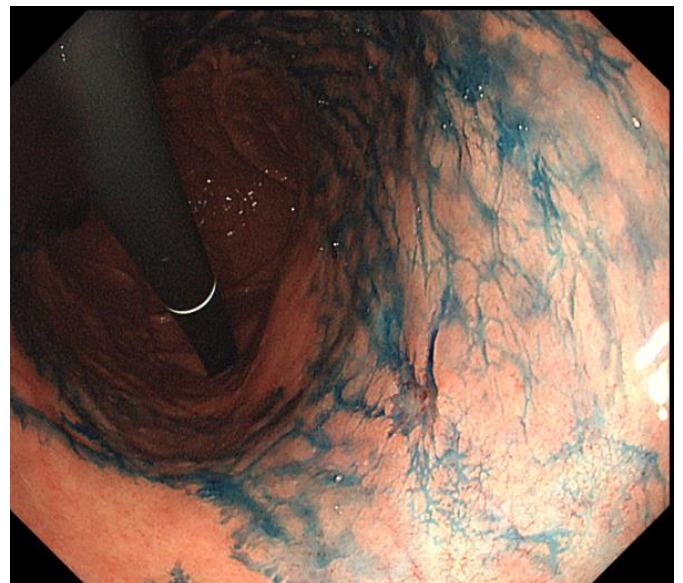
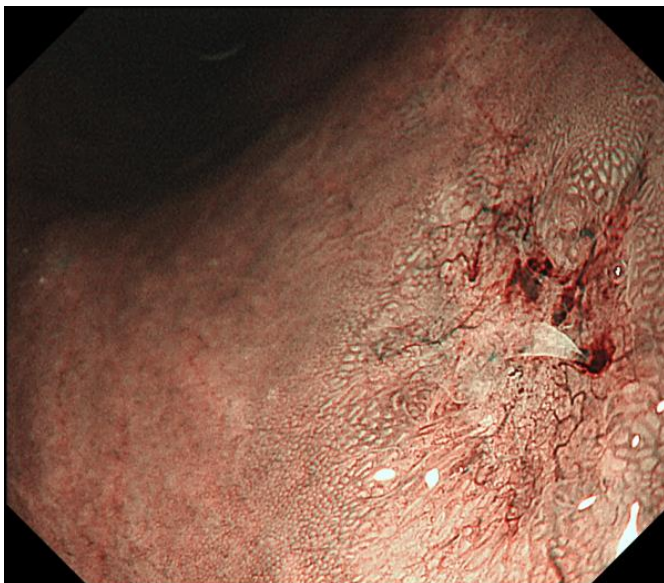
入院時検査所見

身長 164.5cm、体重 53.9kg。体温 36.4℃。脈拍 70/分、整。血圧 131/65mmHg。呼吸数 12/分。

血液所見:赤血球 259 万/ μ L、Hb 9.0g/dL、白血球 3620/ μ L、血小板 32.5 万/ μ L。血清

生化学所見:総蛋白 6.8g/dL、アルブミン 3.2g/dL、総ビリルビン 0.3mg/dL、AST 21U/L、ALT 7U/L、尿素窒素 10mg/dL、クレアチニン 0.65mg/dL、CRP 0.41mg/dL。

上部消化管内視鏡像を次に示す。



①治療として適切なのはどれか。

- a 輸血
- b 内視鏡的止血術
- c 抗菌薬の単剤投与
- d 内視鏡的粘膜下層剥離術
- e プロトンポンプ阻害薬の投与

②上記治療の適応決定に影響しないのはどれか。

- a 部位
- b 深達度
- c 組織型
- d 潰瘍形成の有無
- e リンパ節転移の有無

③再発予防のためにすべきでないことはどれか。

- a 定期的な上部消化管内視鏡検査
- b PPI 投与継続
- c *H. pylori* 除菌
- d 減塩指導
- e 野菜・果物摂取制限

解答

① d

胃体部小弯に 0-IIc の胃癌が認められ、内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の適応である。

② a

a 場所によって ESD が行いづらいことはあるかもしれないが、適応には影響しない。

b 粘膜内に限局している場合のみ適応となる。

c 分化型の場合適応となる。

d 潰瘍のないものが適応となる。

e リンパ節転移のないものが適応となる。

③ e

a 癌の再発や新たながんの発生の恐れもあるので定期的にフォローが必要である。

b 胃粘膜保護のために使用すべきである。

c *H. pylori* 感染は胃癌のリスクファクターである。

d 胃粘膜保護のために減塩すべきである。

e 野菜や果物の摂取は胃癌のリスクを低下させると言われている。